

## 積

## 毛

H: 1800gの脂付き羊毛から1500gになるわけね。  
さいごに降り積もった雪のように羊毛を積み上げる。タテヨコ偶数層に重ねないんだ…そうか、織維の揃ったトップ羊毛を使うからタテヨコにする必要があるけど、そもそも解しただけの羊毛だからね。なるほど…これは今のメイキングの工程?

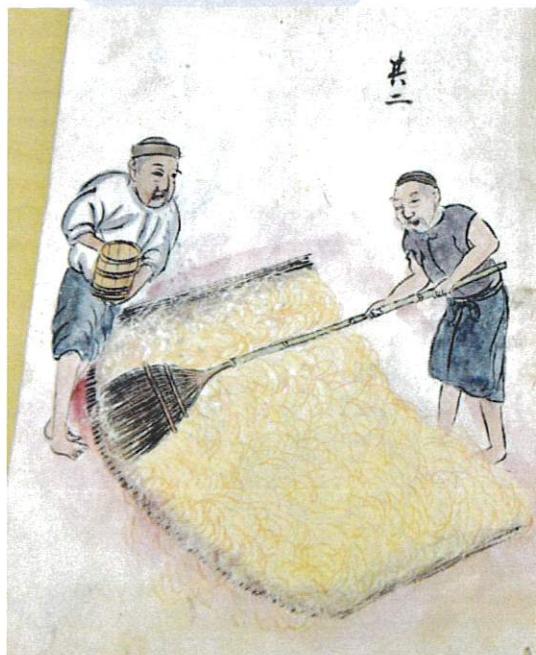


T: 石けん水じゃない、ただの「水」なのね。

H: モンゴルでも脂付きのままの羊毛に水をかけてた。だつて毛刈りしたての羊毛には、そもそも脂(ラノリン)と汗(アルカリ性)が入っているから、水をかけて、縮絨ローリングの段階で圧力をかけて摩擦したら、カリ石けんになる。羊毛の中で石けん作っているみたいなもんやから、そもそも石けん水かける必要ないわけね。

積毛

上…羊毛三斤(約1800g)を弓打ちするのに必要な量一斤五、六合(約1500g)となる。  
下…弓打ちして解した羊毛をさらに毛振竹でしきぎ、綿毛のような極品にする。



右…巻御簾の上に羊毛を均等に散布する。降り積もった雪のように十五から十八cmほどの厚さに積み重ねる。  
左…圧扇で羊毛の層の端を整え、口に含んだ水を霧状に吐き出しながら羊毛を湿らす。

T: この圧扇で毛を押さえてる! これって今のネット(網戸のネット)の役割。水をかけた時に羊毛が飛び散らないようにしてるのね!  
H: 水を口に含んで霧状に噴出してる! これは今はペットボトルで振りかけてるのと同じ。なるほど!

## 開

## 毛

T: おおおお! 汚毛からはじめる。しかも瓦土、これは細かい乾燥した均一な土ということかしら? ふるいをかけて篠竹でたたいてる。



細かくした瓦土を筛るいで漉しながら羊毛にふりかける。脂に被われた羊毛に土をまぶすとほぐれやすくなるので、篠竹でたたきながらじませる。

①開毛 房状の羊毛をほぐす。腰掛に座り、腰掛に座り、



羊毛を打床に広げ、弓打を左右に持ち、右手に持った繩ばちで繩を引き、左右に引き分ける。綿のような羊毛は床下に落ちる。脂分によって塊となった羊毛が左右に落ちるように繩を打き集め、土をかけて篠竹でたたき、さらに繩を引く。

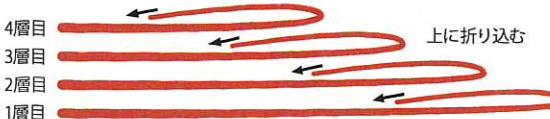
H: この弓打ち、布団づくりで木綿の綿打ちを見たことがある。めちゃ重労働、技術職。布団職人の丹羽さんに教えてもらった。



縁飾りの試作 1  
羊毛の端を上に折り返し、4層重ねる

■試作1

- ・羊毛は赤メリノトップー64g  
64gのメリノ羊毛を(繊維の方向がタテヨコ2方向を1層とし、それを4層分)2×4の8つに分ける。
- ・羊毛をメイキングする。64gで440×310mmからスタートし、仕上がりは297×210mm(A4サイズ)まで、およそ30%縮絨させることを目指す。
- ・羊毛2つ分をタテとヨコに置き、それを1層目とする。四方を上に折り返し、なじませる。
- ・次の2層目もタテヨコに羊毛を置き、1層目よりも1.5cm程内側に控えて表に折り返しなじませる。
- ・3層目・4層目も同様に4段の折り返しを作る。折り返した部分がくっつかないように、テープ状に切ったビニールを挟み縮絨をおこないA4サイズに仕上げた。



■本出さんの所蔵毛氈を見て気付いた点

- ・1段目のベースの羊毛が厚く、3段の縁飾りは薄く平行に並んでいる。
- 同じ厚さの羊毛が4層ある。というより、厚みのあるベース羊毛の上に、3層の縁飾りが付けられている。
- ・縁飾りの縁の仕上がりがなめらかである。私の制作物は普普通と羊毛繊維の突起が見られる。
- これは、メイキングの時の繊維の方向が違うのではないか?
- ・縁を指でつまんでみると少し伸びる。繊維が縁と並行に並んでいるのが目視できる。
- 平行方向にだけ繊維を置いているのか?
- ・3層の縁飾りは、ベースと同じようには縮絨されておらず、縮絨は甘く、非常に薄い。
- ・3層の縁飾りは、揃って並んでおり、3層がまとまってフレアーのように波打っている
- ひだを3層折りたたんで作ったテープ状のものをベースに付けている?
- ・4つの角はたいへん緩やかな丸いカーブの形状に作られている。
- 縁飾りを作りやすいよう、はじめから丸くカーブを作っていると思われる。
- ・本出さん所蔵品はメリノではなく、トルコ羊毛くらい太番手の羊毛ではないか?



# 毛氈を作つてみました

—縁飾り(ひだ飾り)に注目する—

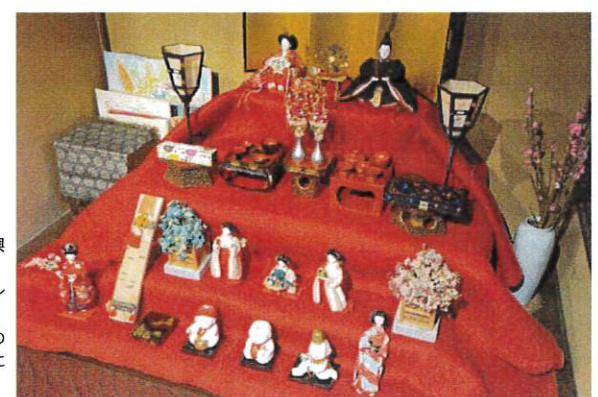
フェルト作家 辻 俊子

吉田孝次郎所蔵 photo:Hatsumi Tanaka

以前より古い緋毛氈や蒙古絞りの毛氈に興味がありました。写真や絵図でしか見たことがなかつたそれらの毛氈はどのようにして作られたのか、特に今の毛氈には見かけられない縁飾り(ひだ飾り)のある毛氈にずっと興味をひかれていました。

そんな時、砂崎素子さんの「長崎毛氈モノ語り」と言う本を本出さんから紹介されました。本文中、江戸時代の180年間(1653~1831)には多様な毛氈が80万枚以上、長崎にもたらされていることがかかれています。

実際にその毛氈を見る事ができないかしらと思っていたら、周囲に4層の縁飾り(ひだ飾り)があるお雛様の緋毛氈を本出さんが所蔵されていると聞きました。その4層の縁飾り(ひだ飾り)はどのように制作されていたのか、実物を見る前にまず私が考えつく方法で作つてみようと思いました。



【辻俊子プロフィール】

tint wool works 辻俊子  
大阪府堺市生まれ。奈良県在住。  
京都教育大学 特修美術科日本画専攻卒業。テキスタイルに興味をもち染縫会社に就職。  
その後、羊毛の自由性に魅せられ、フェルト作家ジョリー・ジョンソン氏の工房でアシスタントを務め学ぶ。  
現在、自身のブランドtint wool works、織作家洲崎英美さんとのコラボブランドSHEEPZとして、グループ展での発表などを中心にフェルト制作活動を行う。